Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* における「ヤフーの皮」について

山内 暁彦

"The Skins of Yahoos" in *Gulliver's Travels* by Jonathan Swift

YAMAUCHI Akihiko

言語文化研究　徳島大学総合科学部
ISSN 2433-345X
第 31 巻　別刷　2023 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
Tokushima University
Volume XXXI, December 2023

山内 暁彦

Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* における「ヤフーの皮」について

山内 暁彦

"The Skins of Yahoos" in *Gulliver's Travels* by Jonathan Swift

YAMAUCHI Akihiko

Abstract

This essay examines the "skins" of the Yahoos in Part IV, "A Voyage to the Country of the Houyhnhnms" of *Gulliver's Travels* (1726) by Jonathan Swift (1667-1745). Taking as its starting point the possibility that Gulliver's treatment of Yahoos' skin could imply his cannibalism, this essay examines Swift's satire from Part IV of *Gulliver's Travels* to his problematic writing, *A Modest Proposal* (1729), which poses an extraordinary plan that the flesh of infants should be served for food. I take "human skin bound books" as a clue to consider the significance of using such Yahoos' bodily parts as their "skins" in manufacturing some objects like "Springs," "Shoes," and "a Canoo." Focusing on the "skin" and "meat" they refer to, I also pay attention to the characteristics of the fictional writers of not only *Gulliver's Travels* but also *A Modest Proposal* and *A Tale of a Tub* (1704). In particular suspicion will be presented that Gulliver not merely made use of the "skins" of the Yahoos for manufacturing various objects but also secretly ate their "flesh." Finally, I discuss the complicated relationships between Gulliver, the Yahoos, and the uncanny Houyhnhnms in Part IV of *Gulliver's Travels*.

序

本論では、ジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift, 1667-1745）の『ガリヴァー旅行記』*Gulliver's Travels*（1726）第４篇「フウイヌム国渡航記」“A Voyage to the Country of the Houyhnhnms” におけるヤフー（Yahoo）とその「皮」について考察する。ヤフーの身体の取り扱い方からガリヴァー自身による「食人」に通じる可能性が想定されることを手がかりに、後年のスウィフトの問題作『控えめな提案』*A Modest Proposal*（1729）において展開される、幼児の肉を食用に供すべきと称する極端な風刺に至るまでを考察する。[1] 特に、「人皮装丁本」の存在を例に、ヤフーすなわち人間の部分をモノ作りに利用することの持つ意味を考える。その際、『ガリヴァー旅行記』だけでなく、『控えめな提案』や『桶物語』*A Tale of a Tub*（1704）などの作品の登場人物ないし語り手が持つ特質に注意を向けつつ、彼らが言及する「皮」や「肉」に注目する。とりわけ、ガリヴァーがヤフーの「皮」を、罠や靴、カヌーなどのモノづくりに有効利用していたのみならず、その「肉」を実は食していたのではないかという疑いを提示し、その真相を検討したい。ひいては、この国でのガリヴァー、ヤフー、フウイヌムの３者の関係性を問題にしたい。

I

どのような文学作品でも人間の営みを記す限りにおいて食事の場面をまったく書かずに済ますことは難しいであろう。短い詩や短編の作品ならそうとも言えないが、小説や演劇などの長い作品ほど、食事の場面が描かれることが増えていくであろう。かなりの長さを持つ『ガリヴァー旅行記』においても、食事の場面はたびたび描かれている。その中で最も読者の印象に残るであろう場面

---

[1] *A Modest Proposal* の元の表題は、*A Modest Proposal for preventing the Children of Poor People From being a Burthen to Their Parents or Country, and for Making them Beneficial to the Publick* であるが、通常は短くこう言われる。本論では邦題として『控えめな提案』を用いるが、短かい邦題はこの他に『慎ましやかな提案』『穏健なる提案』『慎ましき提案』『ささやかな提案』など種々あり、現状では統一されていない。

は、リリパット（小人国）でガリヴァーが大量に飲み食いをしてリリパット人たちに驚かれる場面だろうか。あるいは、ブロブディンナグ（巨人国）でガリヴァーが巨人たちに捕まって間もない時点で描かれる食事の場面だろうか。第３篇、「ラピュタ、その他の国への渡航記」では、特に食事の場面らしい場面はないが、最終、第４篇「フウイヌム国渡航記」では、ガリヴァーがフウイヌムに遭遇し彼らの家に招かれた直後に下記のような食物、それも「肉」にまつわる場面が描かれている。

> The Sorrel Nag offered me a Root, which he held (after their Manner, as we shall describe in its proper Place) between his Hoof and Pastern; I took it in my Hand, and, having smelt it, returned it to him again as civilly as I could. He brought out of the *Yahoo*'s Kennel a Piece of Ass's Flesh, but it smelt so offensively that I turned from it with loathing; he then threw it to the *Yahoo*, by whom it was greedily devoured. [2]

> 栗毛の仔馬が、蹄（ひづめ）と繋（つなぎ）と蹄の間に挟んで（これが彼らの流儀だが、適当なところでまた述べることにしよう）植物の根を１本私に差し出した。しかし、私はそれを手で受け取り、ちょっと匂いを嗅いだのち、できるだけ丁重に返した。すると今度は、ヤフーの小屋から一切れのロバの肉を持ってきた。しかしこれは悪臭がぷんぷんして酷かったので、私は顔を背けてしまった。仔馬はそれをヤフーに投げてやったが、がつがつと食われてしまった。[3]

---

[2] Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, ed. David Womersley, The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, 16 (Cambridge UP, 2012), 343.
以下、スウィフトの原文からの引用はこの版により、ページ数を末尾に記す。

[3] 引用の日本語訳は拙訳。梅田昌志郎訳『ガリバー旅行記』（旺文社、1976 年）、坂井晴彦訳『ガリヴァー旅行記』（福音館書店、1988 年）、柴田元幸訳『ガリバー旅行記』（朝日新聞出版、2022 年）、高山宏訳『ガリヴァー旅行記』（研究社、2021 年）、富山太佳夫訳『ガリヴァー旅行記』（岩波書店、2002 年）、中野好夫訳『ガリヴァ旅行記』（新潮社、1992 年改版）、平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』（岩波書店、1980 年）、山田蘭訳『ガリバー旅行記』（角川書店、2011 年）などを参考にした。以下の日本語訳も同様である。

流石にロバの、おそらくは生の肉は、ガリヴァーは口にする気にならなかったようである。このようにざっと見ただけでも『ガリヴァー旅行記』の中には食事や食料にまつわる記述がたびたび出てくることが分かる。そして、食事の場面の多くで、ガリヴァーは「肉」を食べたことに言及しているのだ。リリパットでは、第１章で、百人余りの島民たちが肉の籠を持って来てくれる。肩の肉、脚の肉、腰の肉とさまざまである。第６章でリリパットの国情をガリヴァーが述べた箇所では、「羊肉は我々本国のものに劣るが、牛肉はとても素晴らしい」“Their Mutton yields to ours, but their Beef is excellent.” (93) とのコメントをしている。ブロブディンナグ（巨人国）でもガリヴァーは肉料理にありついている。巨人の農夫に捕えられ、連れて行かれた先の食卓の上で最初に出された料理が肉である。「細君は少しばかり肉を細切りにし、パンを細かく台の上で砕いて、私の前に置いてくれた」“The wife minced a bit of Meat, then crumbled some Bread on a Trencher, and placed it before me.” (127) という。その後ガリヴァーは宮廷に召し抱えられるが、そこでの食事にも肉料理が供される。「王妃はよく細かい肉を私の皿の一つに入れて下さったが、私は自分でそれをさらに細かく切るのだ。彼女の楽しみは私のちまちました食べ方を見ることだった。」“Her Majesty used to put a Bit of Meat upon one of my Dishes, out of which I carved for my self; and her Diversion was to see me in Miniature.” (149) このように、肉は第１篇、第２篇を通じ、常にガリヴァの食事の一部であっただろう。第３篇になると、ガリヴァーは色々な国を経めぐるので、食事の記述に割かれるスペースは相対的に減少するためか、食事の場面自体多くはない。その中にあって、グラブダブドリブすなわち死者を呼び出せる魔法使いの島の記述の中に会食の場面がある。ガリヴァーによると、「族長と会食する栄に浴する段取りになった時も、別の召使の人たちが来て肉を給仕し、食卓に侍っていてくれた」“I had the Honour to dine with the Governor, where a new Set of Ghosts served up the Meat, and waited at Table.” (287-288) [4]

[4] この箇所の “meat” は翻訳によっては、「肉」ではなく「食事」と訳されているものがある。（中野訳、平井訳、坂井訳、富山訳、柴田訳など）その理由は、“meat” の綴りが “meal” と紛らわしいことか、訳者が使用した原書の表記が

とのことである。

こうしてみてくると、ガリヴァーはどこででも大なり小なり「肉」を食していたことが分かる。ところが肝心の第４篇になると、事情がかなり異なってくる。ガリヴァーの立場として、イギリス社会やヨーロッパ社会に対する風刺をこれまで以上に広範囲かつ激烈に展開する必要が出てくるのだ。ここでは風刺の対象として「肉食」の贅沢も取り上げられることになる。もちろん風刺を展開しているのは真の作者スウィフトであってガリヴァーではない、という議論も可能である。しかしながら、この第４篇では両者の重なり具合はかなりの程度にまで増大していることも事実だ。フウイヌムの主人の前のガリヴァーは、さまざまな切り口で西洋社会の悪習を批判していくことになる。風刺の対象は多岐にわたるが、その中で、金銭欲や贅沢の問題が取り上げられる。以下のようにガリヴァーは説明する。ヤフーと彼が言っているのは人類のことである。

> [W]hen a *Yahoo* had got a great Store of this precious Substance, he was able to purchase whatever he had in a mind to; the finest Clothing, the noblest Houses, great Tracts of Land, the most costly Meats and Drinks; and have his Choice of the most Beautiful Females. (373)

> この貴重な代物をたんまり溜め込んだヤフーは、欲しいと思ったモノならば何でも買えるのだ。それこそ、極上の衣服でも、立派な豪邸でも、広々した土地でも、値段の一番高い肉や酒でも買えるし、どんな美人でも選び放題なのだ。

元々金銭自体が存在しない社会の住民であるフウイヌムの主人は、この説明がまったく理解できない。主人は、「そのために彼は、その高い肉とは何だ、どう

“meal” となっていたか、いくつか考えられる。“meat” が “meal” の事実上の内容物であるためであろう、歴史的には “meat” が “meal” を指す言葉であったことも大いに関係がありそうだが、本論では、梅田訳、高山訳、森訳などと同様に、“meat” をそのまま「肉」と解釈することとする。

してそれを欲しがる者がいるのだ、教えてくれと言い出した」のである。[5]

このように見てきて分かることは、“meat” が食物全般を指そうが、肉そのものを指そうが、『ガリヴァー旅行記』という作品の中には、食事について、なかでも肉食についての記述が各所に見られるということと、それぞれの箇所には何らかの風刺的な意図が込められているということである。そして、作品の第４篇でフウイヌムとヤフーとの間に置かれたガリヴァー自身が、そこではどのような食生活を営んでいたのかという疑問が自然と読者の想像の中に浮かんでくることになる。それまでの各篇では大なり小なり現実の世界を下敷きにした架空の国々を訪れたガリヴァーにとって、それらの国々での食生活にはあまり大きな不自由はなかったろう。何とか凌いで来られたわけだ。ところが、馬の世界、フウイヌム国では状況はまったく異なる。我々人間の世界とは何もかも異なる環境下におかれたガリヴァーは、どのようにして栄養を補給し生命を維持できたのだろうか。中でもタンパク源は何だったのか。こうした疑問がおのずと湧いてくるのである。ガリヴァーはこの国での食事についてはいろいろと工夫をし、自分で食料を調達するのだが、いかんせん馬の食事と同じような秣（まぐさ）だけでは不十分だ。ところが、フウイヌム国にはちょうどうまい具合に家畜化されたヤフーがいくらでもいる。家畜化されておらず野放しになっている者も多数生息している。ガリヴァーはもしかするとこれらのヤフーの肉を食していたのではないだろうか。かなり突飛な想像にも思えるが、この件を検討してみよう。ガリヴァーは、ヤフーを果たして食べたのであろうか。

これを考える前にまずは当地の支配者フウイヌムについて見ておこう。私見によると、フウイヌムは、どうもヤフーを食べてはいないようである。なぜならば、彼らは草食動物の「馬」であるからだ。もちろん、彼らは単なる普通の馬ではない。理性を持った極めて珍しい馬である。作者スウィフトは、彼らフウイヌムらの内面は高邁で理性的であると何度も強調している。一方、彼らの外形に関しては普通の「馬」と同じであるということを我々に印象付けることに苦慮している。このことは、「もの」を掴む際に「フウイヌムは、ちょうど

[5] ここでも “meat” の解釈が問題なのであるが、ここも「食物」の意味ではなく「肉」と解釈しておく。梅田、富山、森、中野、が「肉」。坂井、平井は「食物」である。高山は「山海の珍味佳肴」と、例によって独自の訳。

我々が手を使うように、その前足の繋（つなぎ）と蹄（ひづめ）の中間にある凹んだところを駆使する。それは私が当初思った以上の巧みさでだった。」"The *Houyhnhnms* use the hollow Part between the Pastern and the Hoof of their Fore-feet, as we do our Hands, and this with greater Dexterity, than I could at first imagine." (413) などという記述にもよく表れている。もし仮に、フウイヌムを「馬」と同一の外形を持つものとして設定する意図が作者スウィフトになかったとしたら、フウイヌムは、前足だけは普通の馬とは異なり、うまく「もの」を掴めるように進化をとげているとしても良かったであろう。[6] スウィフトは、そうはせず、あくまでも「馬」そのものの外形をフウイヌムに与えていて、大きな変形は加えていないのだ。このことは、ヤフーの外形が我々人間の外形とはかなり変えられていることと対照的である。以上のことから類推して、フウイヌムの食事もまた、普通の「馬」と同様の草食であると判断して良さそうである。外形が馬のままであれば、体内の消化器官もまた馬のままであるはずだからだ。もっとも、彼らの食事だけは、草食の普通の馬とは異なり、雑食ないし肉食であるという可能性もまったくないわけではない。だが、もしそういう設定であれば、作者はその事情について何らかのヒントや手がかりを我々読者に与えてくれていたのではないだろうか。作品を読む限り、そのようなヒントや手がかりは特に見出せない。よって、絶対に正しいとまでは断言できないものの、フウイヌムは一般的な「馬」と同様の草食動物であり、ヤフーも含めた動物の肉は食べてはいなかったと考えて良さそうである。

一方、ガリヴァーは果たしてヤフーを食べたか否か。このことについて考えていきたい。結論から言えば、実際にガリヴァーはヤフーの肉を食していた可能性が十分にあると筆者は考えている。おそらくはタンパク源として、そして珍味としてもだ。吉岡郁夫によれば、「食人」は以下のように分類できるという。「１　飢餓のとき。　２　籠城して糧食がつきたとき。　３　嗜好物として食べる場合。　４　憎悪の極、怨敵の肉を食べる場合。　５　医療の目的で食べる場合。」の５つである。[7] ガリヴァーの場合は、このどれか一つだけに当てはまるとい

---

[6]「進化」という語が時代錯誤であれば、単に「変化」でも良い。

[7] 吉岡郁夫『身体の文化人類学－身体変工と食人－』（雄山閣、1989 年）274-275 頁。

うことではないだろう。強いて言えば１だが、３や４も少し当てはまりそうだ。２は、状況が籠城に限定されている点では除外されるが、フウイヌムの住む島国自体が他と隔絶しているという点では籠城に近いものがある。４は、ガリヴァーがヤフーを忌み嫌っているのは明白であるから、これも少しは当てはまりそうだ。５は除外して良かろう。ヤフーにはそのような功徳は認めがたいからだ。本論で扱っているのはヤフーであるが、もちろんヤフーと人類は、似ているとはいえ別々の存在である。また、吉岡の本の文脈は、古今東西の食人の中でも「中国の食人」を特に取り上げた箇所である。ゆえに、本論のこの部分で上記の５つの分類に言及することには相応しくない面もある点は認めておきたい。要は、ガリヴァーがヤフーを食したとすれば、それはほとんど「食人」に相当する行為であるだろうということである。ところが、作品にはそのような「食人」の場面（厳密には、「食ヤフー」の場面）は、作中には一切存在していない。ただしそれは、ガリヴァーによる記述を見る限りにおいて、我々読者の目の前にある文字としては書かれていない、ということに過ぎない。例えば「私は毎食ごとにヤフーの肉を煮たり焼いたりして食っていたので、この土地での食事は案外充実していたのだった」などと書いてあれば話は簡単だが、そうした記述は一切ない。ヤフーだけでなく、その他の鳥や動物も含めた肉食が明示的に書かれているというわけではないのである。ただ、書かれていないがゆえにこそ、もしかしたらガリヴァーはヤフーの肉を食していたのではないか？ という疑いが出てくるのである。そして、作品を仔細に読めば、このような疑いを読者の心中に浮かべさすに十分な記述が、第４篇「フウイヌム国渡航記」の各所に見られるのである。その一つが第 10 章の冒頭部分の以下の記述である。

> I had settled my little Oeconomy to my own Heart's Content. My Master had ordered a Room to be made for me after their Manner, about six Yards from the House; the Sides and Floors of which I plaistered with Clay, and covered with Rash-mats of my own contriving: I had beaten Hemp, which there grows wild, and made of it a Sort of Ticking: This I filled with the Feathers of several Birds I had taken with Springes made of *Yahoos* Hairs; and were excellent

Food. (416)

己のささやかな暮らしを、私は満足のいく形で営んでいた。母屋から６メートルほど離れたところに、主人がフウイヌム式の部屋を作って下さったので、その壁に粘土を塗り、床には自分で拵えた藺草の筵を敷いた。この国に野生で育つ麻を叩いて布団に仕立て、これにヤフーの毛で作った罠で捕まえたいろいろな鳥の羽を詰めた。

原文の“*Yahoos* Hairs”は、ヤフーの毛髪ないしは体毛である。[8] だが、それでもってどのようにしてガリヴァーが上手く「罠」(Springes) を作ることができたかは不分明である。この作品の随所に見られるように、詳しい説明はここでも省略されてしまっている。しかし、この記述からは、「毛」だけでなく、ヤフーのその他の体の一部分をも、何らかの形でガリヴァーやフウイヌム達は有効に利用していたのではないかという疑念が生じるのである。遡って、第２編「ブロブディンナグ渡航記」においても、人間の肉体の一部をガリヴァー自身がしっかりと有効利用していたのだった。

I showed him a Corn that I had cut off with my own Hand, from a Maid of Honour's Toe; it was about the bigness of *Kentish* Pippin, and grown so hard, that when I returned *England*, I got it hollowed into a Cup, and set in Silver. Lastly, I desired him to see the Breeches I had then on, which were made of a Mouse's Skin. (211)

私はある女中の足の爪先から手ずから切り取った〈魚の目〉を彼に見せてやった。それはちょうどケント産の小リンゴほどの大きさだった。とても硬くなっていたので、私が英国に帰ったとき、それをくり抜いて盃状にしてもらい銀器に嵌め込ませたのだった。最後に、その時履いていた、ネズミの皮で作ったズボンを彼に見てくれるように頼んだ。

[8] 現在の綴りではアポストロフィが添えられて、“Yahoos' hairs”となる。

ブロブディンナグ（巨人国）の女性といえばガリヴァーの 12 倍の身長を持っているはずだ。身長だけでなく体の各部のサイズもこの倍率であるから〈魚の目〉の大きさが我々の尺度で仮に 1 cm だとしても、それを 12 倍すれば、我々にとっては 12cm の大きさになる。肉体の巨大さとそれに付随する醜さの点をことさらに強調する意図がスウィフトにあったとしたら、この〈魚の目〉でできたカップもまた、奇妙な味わいをカップの使用者のみならず読者にももたらすものであるに違いない。これはガリヴァーが英国に帰ってから人に作らせたもので、厳密には巨人国滞在中に彼が使用したものではなが、いずれにせよ、人体の部品をガリヴァーが有効利用していたことに変わりはない。したがって、巨人国の女中の〈魚の目〉で作ったカップは「ヤフーの毛の罠」を先取りしていることになる。さらに、上の引用の最後の部分の「ネズミの皮」（a Mouse's Skin）でできたズボンは、ガリヴァーではなく親切な巨人たちが作ったものであろうが、ネズミなどの動物の「皮」でできた衣類を身につけることがガリヴァーにとって何の違和感もない自然な振る舞いであったということが分かる。この点にも注意しておきたい。なぜなら、ガリヴァーは第 4 篇ではヤフーの「毛」のみならず「皮」もまた有効利用することになるのであるから。

II

ガリヴァーが「ヤフーの肉」を食ったかどうかは、作品には明示的には書かれてはいないものの、彼は、ヤフーの様々な体の部分を有効利用していたのは間違いない所である。ガリヴァー自身、フウイヌム国での暮らしが長く続いていく過程で、その土地の風習に適応して行ったことは想像に難くない。その中で、ヤフーの体の色々な部分を、フウイヌム達が有効に利用しているというのが常の状態であったのなら、ガリヴァー自身もそうした風習ないしは習慣を易々と受け入れたであろうことも想像に難くない。何しろガリヴァーは、この国で暮らすうちにフウイヌムに徐々に心酔して行ったのだから。

ガリヴァーは「ヤフーの毛」を有効利用して作った「罠」で鳥を捕まえたのであるが、これはガリヴァー独自の工夫であったのか。あるいは、フウイヌム

達が以前からヤフーの毛を利用していたのか。これもテキストには直接書かれていないため、どちらとも言えない。我々は想像する他ないのであるが、ヤフーの毛は、それ以外の体の部分に比べて、入手することは容易であろう。創意工夫の才能に恵まれたガリヴァーの普段の行ないから推測して、彼自身の思いつきによる工夫であるとしても良さそうである。しかし、これとは真逆に、元々フウイヌムらはヤフーの毛を利用していたと考えることもできるだろう。そうであっても別に不都合はない。しかし結局のところ、実際どうであったかはよく分からないことではある。

これに対して、より詳しい検討を要するのは、同じく第 10 章の冒頭の箇所である。そこには、ガリヴァーは自分の靴下を「ンヌーノー」（Nnuhnoh）という動物の毛皮で作った、という記述がある。先に挙げたネズミの皮のズボンとは異なり、ここはガリヴァー自身が毛皮を加工して靴下を作ったことがはっきりとしている。この直後にはこう書かれている。「靴底には切り出した板切れを用い、上の皮にぴったり合わせた。上の皮が擦り切れると、今度は日に当てて乾かしたヤフーの皮を使った。」"I soaled my Shoes with Wood which I cut from a Tree, and fitted to the upper Leather, and when this was worn out, I supplied it with the Skins of *Yahoos*, dried in the Sun." (416) ここでガリヴァーは、「ヤフーの皮」を使っていることを表明しているのだ。

ではなぜこのような面倒なことにガリヴァーは一生懸命になったのだろうか。やはり靴や靴下はなくてはならないものなのか。ここで参考になるのは Philip Armstrong の指摘である。彼は、*What Animals Mean in the Fiction of Modernity* でこう述べている。

> He uses the skins of hominid beings to conceal his own hominid form; he covers his limbs with the pelts of Yahoos to hide his own pelt's similarity to theirs. This logic works only because the practice of clothing creates a human–animal distinction: the animal is by definition what gets made into clothing, and the human is the one who

wears it. [9]

ガリヴァーが、フウイヌム達からヤフーと同一視されてしまわないためには、彼にとって靴や靴下は必要欠くべからざるものであるのみならず、衣服を提供するのが動物であり、その衣服を着るのが人間であるという図式になっていることが指摘されている。彼はまた、デフォーのロビンソン・クルーソーが再三自分の靴や靴下に言及していることと、ガリヴァーの靴下作りとの関わりも指摘するが、それはまた機会をあらためて考察したい。

さらにガリヴァーは、「ヤフーの皮」（the Skins of *Yahoos*）という言葉を何のためらいもなく書き記していることにも注目したい。行為の異常さとそれを記述するための言語の平静さとの齟齬が非常に印象的ではないだろうか。そもそも、ヤフーであれ何であれ、動物の「皮」というものは、彼らの「毛」ほどは容易に手に入らないはずだ。そして、ヤフーの「皮」を手に入れた後も、ガリヴァーはそれに対してさまざまな処理を施す必要があったはずである。単に「日に当てて乾かす」だけではないのは明らかだ。ここで浮かび上がってくるのは、ガリヴァーがこの国に到来する以前から、フウイヌム達が、「皮」をはじめとするヤフーの体の各部分を元々有効利用していたのではないか、という疑念である。扱い方が面倒であるがゆえに、利用するための手順や方法が元々確立していたという解釈である。そうしてみると、簡単に手に入ると思われた先ほどの「毛」についても、面倒ではないがゆえに、それをフウイヌム達は元々利用していた可能性もあると言って良いことになる。

最近見事な『ガリヴァー旅行記』の翻訳を上梓した柴田元幸は、上記の引用箇所につけた注に以下のように記して、読者に対し注意喚起を行なっている。

> ヤフーの髪で罠を作るのはむろん、皮を靴に使うのも、ガリバーにとっては有効活用ということなのだろうが、ナチスの人体実験以降、こうした「活用」の話を心穏やかに読むのはやや難しくなっている。[10]

---

[9] Philip Armstrong, *What Animals Mean in the Fiction of Modernity* (London and New York: Routledge, 2008) 15.
[10] 柴田元幸訳『ガリバー旅行記』（朝日新聞出版、2022 年）427 頁。

「フウイヌム国渡航記」第 10 章冒頭の部分は、それに先立つ章で風刺的な対話を延々と読まされてきた読者にとって、ガリヴァーのその土地での「暮らしぶり」とでも言うべき比較的軽く感じられるような記述になっている。かなり気を抜いて読めてしまう箇所であるため、一般的な読者はややもすれば一字一句をしっかりと読まず、斜めに読み飛ばしてしまう恐れが十分にある。だが、この柴田の翻訳では、上記の引用のような注釈が付けられていることによって、一見軽く読み飛ばせそうな箇所にも、重要なポイントが作者スウィフトによって潜ませてあることに読者の注意が向けられる。たいへん意味深い注釈であるとして高く評価したい。

柴田の翻訳に注がつけられているのと同様に、我々が作品から原文を引用するために使用しているケンブリッジ版スウィフト全集の *Gulliver's Travels* にも注がつけられているはず、それも、もっと詳しい注が付けられているはずと思いきやそうではない。意外である。ケンブリッジ版には長い注（Long Notes）も充実しているが、そこにもこれと言って記述はない。やはり意外としか言いようがない。その代わりに古いオックスフォード版を見てみよう。すると、なぜかは分からないが、やはり注は特に打たれていない。柴田によって書かれた感想のようなものすら書かれていない。おそらくこれは、さらに大きな問題につながる問題を孕んでいるためではなかろうか。一つの「注」で簡単に片付けることはできない、というケンブリッジ版やオックスフォード版の編者たちの考え方の現れであると思われる。そこで今度は、我が国のスウィフトの読者が必ず手にすべき、原田範行らの『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈［注釈篇］』に当たることにする。すると、「ヤフーの毛の罠」や「ヤフーの皮の靴」に直接つけられた注はないものの、第 10 章の最後の部分の、カヌーをヤフーの皮で張った、という箇所には注がつけられている。結局のところ、この箇所こそがそれまでに言及されてきたヤフーの体の部分をモノ作りに利用したことに関する記述のまとめとして捉えられるだけでなく、読者の印象に最も強く残る部分でもあるという判断からだろう。当該の注の後半部分は以下のように書かれている。

> 醜悪なヤフーとの差異こそ、この第四篇におけるガリヴァーの大きな課題であり、結局その差別化に失敗してしまうわけだが、その原因の一つとして、ヤフーを道具としては都合よく利用するというこのガリヴァーの姿勢を考えることはできないだろうか。[11]

この修辞疑問文の答えは自ずから「否、考えることができる」である。そこで問題になるのはやはりガリヴァー自身の意識である、ということであろう。一体彼自身は自分とヤフーとの差異と同一性をどのように考えているのだろうか。それは一口に言って「さまざまに揺れ動いている」としか言いようがない。例えば、「ガリヴァーからシンプソンへの手紙」"A Letter from Capt. Gulliver to his Cousin Sympson" では以下のように述べられている。

> *Yahoo* as I am, it is well known through all *Houyhnhnmland*, that by the Instructions and Example of my illustrious Mater, I was able in the Compass of two Years (although I confess with the utmost Difficulty) to remove that infernal Habit of Lying, Shuffling, Deceiving, and Equivocating, so deeply rooted in the very Souls of all my Species; especially Europeans. (14)

> 自分はヤフーではあるが、フウイヌム国じゅうよく知られている通り、すばらしい主人の教えと範をえて、2年の内に（この上なく困難であったことは白状するが）、自分の種族全員、とりわけヨーロッパ人の魂深くに根付いている、嘘をつく、言い逃れる、騙す、言葉を濁すといった悪習を克服したのである。

この記述を文字通りに受け取れば、ガリヴァーが、自分がヤフーであることを自ら公言しているかのように見える。しかし、ここで気をつけねばならないの

---

[11] 原田範行、服部典之、武田正明『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈［注釈篇］』（東京：岩波書店、2013年）532頁。

は、これは自分の『旅行記』がヨーロッパやイギリスの人々に受け入れられずじまいだったことへの恨みごとであるということだ。確かに作品は巷間の人気を博してよく売れたが、ガリヴァーは（あるいはスウィフトもまた）それを喜んではいない。風刺の実が上がっていないことを嘆いているのだ。そして、ここでガリヴァーは、一旦自分をヤフーの仲間に入れておいてから、実はヤフー（すなわち人類）と自分とはまったく異なっているという事実（ないし信念）を主張する。「自分はヤフーではあるが」"*Yahoo* as I am" という言葉は、そのための単なる「前置き」であるに過ぎないという点こそが重要なのである。ガリヴァーはヤフーと同じであるどころか、彼らの持つ悪習を自分自身は免れているという信念こそをガリヴァーは表明しようとしている箇所であるのだ。ここでの力点は、自分はフウイヌムの主人に薫陶を受けた「立派なヤフー」であるという点にこそ置かれている。上記の「自分はヤフーではあるが」という言は、ガリヴァーの表向きのポーズであるに過ぎない。ガリヴァーは自らの内面はフウイヌムに近いと自負していて、並のヤフーすなわち人類一般とはまったく異なるという信念を強固に持っていると読むのが正しい。Irvin Ehrenpreis も *Swift Studies 2003* の論文 "How to write *Gulliver's Travels*" で以下のように簡潔に指摘しているが、まさに彼の言う通りである。

> He [Gulliver] first mistakes the centaur-like Houyhnhnms for horses and ape-like Yahoos as for unknown beasts. Later he takes the Houyhnhnms as models for him and mankind to copy, and the Yahoos as degenerate men for him to repudiate. [12]

この国でのガリヴァー、ヤフー、フウイヌムの３者の関係性は常に問題視されるのであるが、このようにある程度簡略化して考えることも重要であろう。

---

[12] Irvin Ehrenpreis, "How to write *Gulliver's Travels*" *Swift Studies 2003: The Annual of the Ehrenpreis Center* (Munster: Wilhelm Fink Verlag, 2003) 13.

Ⅲ

ここからは「ヤフーの皮」で張ったカヌーが言及されている箇所をあらためて検討していくことにする。こここそが『ガリヴァー旅行記』全編の中でも最も忌まわしい箇所の一つではないかと筆者には思われるのだ。少し長くなるが関係する部分を以下に引用する。

> . . . in six Weeks time with the Help of the Sorrel Nag, who performed the Parts that required most Labour, I finished a Sort of *Indian* Canoo, but much larger, covering it with the Skins of *Yahoos*, well stitched together, with hempen Threads of my own making. My Sail was likewise composed of the Skins of the same Animal; but I made use of the youngest I could get, the older being too tough and thick: and I likewise provided myself with four Paddles. I laid in a Stock of boiled Flesh, of Rabbits and Fowls; and took with me two Vessels, one filled with Milk, and the other with Water.
>
> I tried my Canoo in a large Pond, near my Master's House, and then corrected in it what was amiss; stopping all the Chinks with *Yahoos* Tallow, till I found it stanch, and able to bear me, and my Freight. And when it was as compleate as I could possibly make it, I had it drawn on a Carriage very gently by *Yahoos*, to the Sea-side, under the Conduct of the Sorrel Nag and another Servant. (424)

・・・この栗毛にいちばん力のいる部分の仕事をしてもらったおかげで、6週間後にはインディアンのカヌーに似た、ただし大きさはずっと大きなものを仕上げ、自前の麻糸でしっかり縫い合わせたヤフーの皮を全体に張り付けた。帆もやはり同じ動物の皮で作ったが、年をとった奴の皮は硬くて厚いので、なるべく若い奴のを使うことにし、同じやり方で櫂も4本用意した。中に積み込んだのは、ウサギと鶏の肉を茹でたもの若干と、牛乳と水の計2つの容器だった。

カヌーは主人の家の近くの大きな池で試してみて、まずい所は手直しし、隙間はすべてヤフーの脂肪でふさいで水漏れを止め、私と荷物の重さとに耐えられるようにした。できる限り完全に仕上げたところで、栗毛ともう一人の召使の指揮のもと、荷車に乗せて、海岸まで、できるだけ慎重にヤフーに牽いて行かせた。

カヌーの船体や帆を作るにあたって、ヤフーの皮のみならず「ヤフーの脂肪」（*Yahoos* Tallow）をもガリヴァーは有効利用していたのだ。[13] そしてここにも明示的には書かれていないのだが、ウサギと鶏の肉の他に「ヤフーの肉」をもガリヴァーは自分のカヌーに持ち込んでいたのではないかとの疑念を読者に抱かせるような記述になっているのである。

ガリヴァーは自分のことをヤフーであると言いながらも本心ではまったくそうは思っていないのだが、そうであるからこそ、ヤフーを動物並みに扱って何の痛痒も感じない。感じないどころか、その状況をフウイヌム国の滞在中も存分に楽しんでいた節がある。ガリヴァーの外見は、馬と姿形が同じであるフウイヌムとはまったく異なっている。各部の相違は多くあっても全体的にはヤフーの方によく似ているため、彼はヤフーに対しては、例えて言うと神の如き感覚を持っていたに違いないのである。それが言い過ぎであれば、この上ない優越感を持っていたと言っても良い。この状況を逆の見方で見ればどうだろうか。すなわち、ヤフーから見てガリヴァーはどう見えただろうかということだ。もちろん、自分達と一見姿形は似てはいても、自分たちの支配者であるフウイヌムと親密にしているガリヴァーは、ヤフーにとって非常に疎ましい存在であったに違いない。そうかと思えば一方では、第８章で言及される、例の雌ヤフーのように、ガリヴァーに対して肉体的接触を試みてくる者もいるという、混沌とした状況になってしまっている。ガリヴァーはこの篇の結末で、フウイヌムからの勧告で国外追放となったが、このことを最も喜んだのは他ならぬヤフー達であっただはずだ。どうにも目障りな酷い奴、もしくは変な奴がいなくなって清々した、といったところだろう。もっとも彼らはヤフーなので、そこまで

[13] 現在の綴りでは "Yahoos' tallow" となる。

の感情すらない恐れはある。もし人間であれば多分こういう感情を持ったであろうという、これは筆者の推測である。

ヤフーから見てガリヴァーから受けた仕打ちがいかに酷いものであったかということは、実は原作を読むより、原民喜の再話を読んだ方が理解しやすい。再話というものは往々にして原作を質量ともに軽んじてしまうことになりがちだが、原の場合は例外的に元の作品自体が潜在的に隠し持っていた意味を明らかにしてくれる稀有な例であると言えよう。そうした箇所はいくつも抽出することができるだろうが、本論では以下の箇所に着目したい。

> 船はヤーフの皮で張って、手製の麻糸で縫い合せました。帆もやはりヤーフの皮で作りました。兎と鳥の蒸肉、それに牛乳、水を入れた壷を二つ、それだけを船に積み込んでおきました。私はこの船を家の近くの大きな池に浮べてみて、悪いところをなおし、隙間にはヤーフの脂を詰めました。いよいよ、これで大丈夫になりました。そこで、今度は船を車に積み、ヤーフたちに引かせて、静かに海岸まで運んだのです。[14]

この 200 字足らずの短い文章の中に「ヤーフ」という語が 4 度見える。[15] そのうち 2 箇所が「ヤーフの皮」で、1 箇所が「ヤーフの脂」である。さらに車に積んだ船を「ヤーフたちに引かせ」たわけだ。原文を見てみると、実はここは少し異なっている。先ほどの引用と比較すればよく分かるが、大筋は同じ内容なのだが、2 回目の「ヤーフの皮」は、単に「同じ動物の皮」（the Skins of the same Animal）である。これを原は、あえて「ヤーフの皮」という直接的な表現に変えたのだった。そして、何よりも全体の分量がかなり減らされている。分量が減ることで、「ヤーフ」という語の頻度は相対的に上がる。短い文章にすることは再話をする際に必要であったことだが、話の流れが分かりやすくなっ

---

[14] 原民喜『ガリバー旅行記』（講談社、講談社文芸文庫、1995 年）212 頁。
[15] 原民喜はこの再話では一般的な「ヤフー」ではなく「ヤーフ」という呼称を用いている。このことの意味については拙論「原民喜『ガリバー旅行記』の「アンポニア」と「ヤーフ」、Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* の “Amboyna” と “Yahoo” について」を参照されたい。

ただけでなく、「ヤーフ」という語が読む者の印象に非常に強く残るという効果が出てきたわけである。その効果を実感するには、我々自身がこの再話の中の「ヤーフ」だと想像しさえすればよかろう。その効果が如何なるものかが身にしみて分かるだろう。それが難しい場合には、「ヤーフ」の部分に別の語を代わりに当てはめてみても良いだろう。それは、例えば、「ユダヤ人」「朝鮮人」「黒人」「白人」「坊主」「ヤブ医者」「マスコミの奴ら」「御用学者」「バカ学生」など、差別的で敵対的な、否定的感情を少しでも込められるような言葉でありさえすれば何でもよい。[16] 人によってそれは実に多種多様であることだろう。ただし代入する言葉は動物であってはあまり効果がない。「イヌ」や「ネコ」、「ウシ」や「ウマ」などでは駄目だ。あくまでも人間でなければならない。そして人間であっても特定の個人では良くない。ある種のステレオタイプ化されうる集団でなければならない。原民喜からの引用文の「ヤーフ」という語の代わりに様々に思い浮かぶ語を次々に入れていくという、この簡単な実験をしてみれば、これを試金石として、いかに自分が他者を差別しているか、いかに人間が人間を差別しているかが、あらためてよく判断できるだろう。

ここまでのところ、ガリヴァーによる「ヤフーの皮」の有効利用について述べたが、虚構から一旦離れて、実際に「皮」をモノ作りに利用するということが、いかに現実にあり得ることかがよく分かる例を見ていこう。すなわちここからしばらくは『ガリヴァー旅行記』中のヤフーという虚構的な創造物から一旦離れ、現実世界での「人間の皮」の利用法を見ていくということだ。インターネットの記事をいくつか紹介する。まずは、「人皮装丁本～人間の皮で作られた本が世界で 100 冊以上存在する 【若い女性や犯罪者の皮膚を使用】」である。[17] 以下にその要点を述べる。本の装丁には動物の皮（羊、豚、牛など）が使われるものであるが、まれに人間の皮膚すなわち「人皮（にんぴ）」が使用されることがある。これがいわゆる人皮装丁本（にんぴそうていほん）である。

---

[16] 言うまでもないが、「ユダヤ人」以下に挙げた人々に対して筆者は毫も偏見や差別的感情を持っていない。これらは単なる例示であるに過ぎない。

[17] <https://kusanomido.com/study/overseas/72574/>（2023 年 11 月 14 日閲覧）

[18] これは「16 世紀頃には主にヨーロッパで登場していたとされ、17 世紀には製本技術が確立していた」ということである。『ガリヴァー旅行記』の出版は 18 世紀初頭（具体的には、初版が 1726 年）であるから、すでにこうした本は世の中に存在していたことになる。使用されたのは「死刑になった犯罪者」や「解剖された死体」の皮膚であったという。時代が下って 19 世紀には、ウィリアム・コーダー（William Corder）なる人物が、罪を犯し絞首刑になり、彼の死体の皮膚は剥がされ鞣された後、彼自身が起こした事件に関する本の装丁に使用されたということである。[19] いずれも現在の感覚では、にわかには信じられない事柄ではあるが、我が藤田嗣治（ふじた つぐはる）画伯もまた、人皮装丁本を所有していたとされる。その本は「1711 年にスペインのマドリードで出版された小型の宗教書」であり、古書研究家・斎藤昌三は、藤田画伯から白人の皮膚を鞣したと思われる人皮装丁本を見せられたことがあるという。この記事の信憑性の程度を調べるのは後日の機会に譲ることとし、今は「1711 年」という年代に注目したい。片やスペイン、片やイギリスと、国は違えど、まさにスウィフトと同時代である。[20] 現実の世界の「人皮装丁本」の人間の皮を、ヤフーの皮に置き換えることに何の不都合もないことになるだろう。もっとも、フウイヌムの国には文字は存在しないことになっているので、本というモノも当然ながら存在しない。しかし、仮にフウイヌムの国に我々の文明世界と同じように文字があり書物があったとしたら、やはりヤフーの「皮」が利用されたことだろう。もちろん、現実の世界でも人皮装丁本自体が非常に珍しい物であるので、フウイヌムの国でもその希少さの程度は我々の世界と同じかもしれない。フウイヌムの国にはウシもいることになっているので、より大きな体表面積をもつウシを彼らはまずは有効利用したはずだ。ヤフーはその次だろうか。いずれにせよ、我々の住む現実の世界において、それもスウィフトと同時代に、

---

[18] サイトではこのように「にんぴそうていほん」という仮名表記であるが、本論の筆者としては「じんぴそうていぼん」と濁点の多い漢音で呼称したい。

[19] コーダーは「赤い納屋殺人事件」として当時よく知られていた事件の犯人である。詳しくは、「そして犯人の皮膚は本の装丁にされた　赤い納屋殺人事件」<https://441notepad.com/red-barn-murder>（2023 年 10 月 30 日閲覧）を参照。

[20] スウィフトは、1667 年生まれ、1745 年死去。

こうした本が存在したということであれば、『ガリヴァー旅行記』という作品の中に、本とは異なる形であれ、ヤフーの「皮」を用いて様々なモノが作られたことが書かれていても何の不思議もないことになる。インターネット上には先に紹介した記事以外にも、この種の本の画像がいくつも挙げられているが、一見するとそれらは、我々がしばしば目にする一般的な羊皮紙などの獣の皮を利用して装丁された本と区別はつかない。表面に残る人間の毛穴の有無は、きめの粗い画像でははっきりと写ってはいないという事情もあり、視覚的な違和感はほとんどない。[21] そうであるにもかかわらず、これが元々は人間の皮膚であったということを一旦知れば、このような画像を見たり、説明の記事を読んだりすれば、誰しもが薄気味の悪さを感じるのではないだろうか。さらには、背景にいかなる事情があったのであれ、人間の皮膚をモノ作りに有効利用するという行為そのものが悍ましく感じられるのではないだろうか。

そこで一つ、筆者の脳裏に浮かんだことを述べよう。ガリヴァーは、スウィフトと同様、『旅行記』の出版を業者に任せたので、実際にはありえないことなのだが、彼自身がヤフーの「皮」を英国に持ち帰りその皮を用いて（あるいは、現実世界のヤフーすなわち人間の「皮」を用いて）自らの『旅行記』の装丁を行なったとしたらどうだろうか。我々読者の手元にある『ガリヴァー旅行記』がまさに人皮装丁本の一つになってしまうという、この上なく悍ましい事態になる。もっとも、それは 18 世紀の初版本に限ったことにはなるであろう。現代の出版社がヤフーの皮で装丁した『ガリヴァー旅行記』を出すことはありそうにない。何らかの犯罪が背後に想定される事態であるからだ。あるいは、スウィフトと同時代の出版社でもいいし、現代の出版社でもいいのだが、「この作品はヤフーの皮で装丁が施されたものである」などという文言が作品のどこかに書かれていたらどうだろう。それは、本文中でもいいし、前書きや後書き、帯やカバーでも良い。何も実際に人皮を使う必要はなく、「使用してある」という言葉だけで十分だろう。これはいわゆるフェイクや捏造に相当する行為であるから、また別の問題を招きかねないが、人々に与える衝撃は簡単に高められる

[21] 例えば、「生きた人間の皮膚で作られた『人皮装丁本』がハーバード大学の図書館で発見される・・・」<http://jin115.com/archives/52012150.html>（2023 年 10 月 27 日閲覧）を参照。

であろう。だが、もし本当にこれをした場合に、当の本の売れ行きがどうなるかは分からない。相当高額にしておかないと元が取れない恐れは十分にある。それだけこの種の本や製品を買い求める人は限られるということである。あるいは、人皮という限られた素材を本当に使うことになれば、もしかするとその本は一点ものになるやもしれぬ。稀覯書中の稀覯書だ。そうであればその金額は見当もつかない。また、使用した人皮の元の所有者が誰であるかにもよっても、本の価値はまた大きく変わってくることだろう。このように、人皮装丁本から触発されて湧き出てくる忌まわしくも面白い連想には際限がない。これ以上の想像は、本論の読者諸賢に委ねておくこととしよう。

Ⅳ

先に、本の装丁には普通は獣の皮が使われると述べたが、以下に分かりやすい説明を参考のために引用しておきたい。これを一読すれば、なかなか面倒な手間がかかることがよく分かるであろう。

> 表紙の表面の材料には羊、山羊、牛、子牛、豚の革が使われました。生の皮を発酵させて獣毛を取り、石や金属でこすって脂肪分を落とします。子牛皮の上質なものはヴェラムと呼ばれます。さらにタンニン液につけてなめすとしなやかな革になります。子牛革はやわらかく、どのような色にも染めることができますが、赤味がかった茶色がよく使われました。山羊革は木目やしわがはっきり出、あざやかな赤や青、緑に染められていることが多く、モロッコ革とも呼ばれます。豚革は毛穴に特徴があり、普通みょうばんでなめします。羊革は多孔質でふわふわしています。時代、地域によりこれらの革の使われ方に違いがあり、15 世紀においてはドイツでは豚革が、イギリスでは子牛革が、イタリアでは山羊革が多用されました。[22]

[22] 国立国会図書館「インキュナブラ－西洋印刷術の黎明－、第四章　製本と装丁」<https://www.ndl.go.jp/incunabula/chapter4/index.html>（2023 年 11 月 8 日閲覧）

説明がデスマス調になっているのは、国立国会図書館の企画の宣伝文から取ったためであるが、ここに書かれていることに大きな間違いはないだろう。注目すべき点は、生の皮を発酵させて獣毛を取り、石や金属でこすって脂肪分を落とし、タンニン液につけてなめしたり、明礬（みょうばん）でなめしたりと、相当の手間ひまがかかるという点だ。ガリヴァーはさも簡単そうにヤフーの皮の利用について記述しているが、このような情報に接した後では、実際には簡単であったとは思えなくなってくる。そうかと言ってガリヴァーが虚言を弄しているとまで断じてしまうと、彼の語る物語そのものの扱い方が難しくなってしまう。ここは、彼の言を信じておくことにしたい。むしろ問題なのは、彼が語っていないことの方である。

先ほど、人間の皮膚を本の装丁に利用するという例を見たが、本の装丁のみならず、我々が目にする革製品一般にも「人皮」が使用される可能性があることに誰しも思い至るであろう。[23] 「フウイヌム国渡航記」でガリヴァーが語っている彼の「靴の皮」や「カヌーの皮」が、まさにこれである。そして、「皮」の使用ということで多くの人が思い出すであろうことは、スウィフトの作品中で下記の様な非常に印象に残る言葉が述べられている点であるに違いない。すなわち、「先週私は女が皮を剥がれるのを見たが、彼女の姿がどこまで醜悪になるものか、あなた方はほとんど信じられないだろう」"Last week I saw a woman flayed, and you will hardly believe how much it altered her person for the worse." [24] という言葉である。これは『桶物語』の第９章「一国における狂気の起源と利用改善良に関する脱線」"A Digression concerning the Original, The

---

[23]「人皮」を「人工皮革」の省略形として使用する場合があるが、使用者は変な略し方をしていることに気づいていないのであろう。

[24] Jonathan Swift, *A Tale of a Tub and Other Works*, ed. Marcus Walsh, The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, 1 (Cambridge UP, 2010), 112. 以下、スウィフトの『桶物語』原文からの引用はこの版により、ページ数を末尾に記す。日本語訳は拙訳。深町弘三訳『桶物語・書物戦争』（岩波文庫、1968 年）、中野好之、海保真夫訳『スウィフト政治・宗教論集』（法政大学出版局、1989 年）、富士川義之訳「スウィフト 桶物語 抄」『澁澤龍彦文学館 3 脱線の箱』（筑摩書房、1991 年）などを参考にした。以下同様である。

Use, And Improvement of Madness in a Commonwealth.” の中の一節であり、スウィフト研究者の中では知らぬ者のいないほど有名な箇所であるが、ここで唐突に「女が皮を剥がれるのを見た」などというかなり衝撃的な記述が出てくる。その後は、「昨日、私は一人の伊達男の死体を目の前で解剖してもらったのだった」“Yesterday, I ordered the Carcass of a *Beau* to be stript in my Presence.” (112) という記述が続いていく。女の方の記述が少ないのと比べて、男の方の記述はこの後も延々と続き、人やモノは、その表面に比べて内側の方がいかに劣っているかという説が縷々述べられるのである。最近の「ルッキズム」に対する批評の嚆矢であるかのような文章だ。これを述べている人物は、厳密にはスウィフトではなく、『桶物語』の表面上の筆者であるのだが、その人物像はスウィフトの設定するいずれの仮想的な筆者とも同じく、その正体は判然としない。第 9 章は『桶物語』の脱線の章の中でも特徴のある章であるが、筆者は融通無碍と言おうか、ほとんど言いたい放題の記述を重ねて行っているので、どの程度彼の言葉をまともに受け取って良いかも判然としない。第 9 章末尾の筆者本人の言によると、彼自身がこのような人物である。

> I my self, the Author of these momentous Truths, am a Person, whose Imaginations are hard-mouth’d, and exceedingly disposed to run away with his *Reason*, which I have observed from long Experience, to be a very light Rider, and easily shook off . . . (116)
>
> 私、すなわちこの重大な真理の著者は、手に負えぬ想像力の持ち主であって、これは理性を背中に乗せたままで走り出す危険が非常にあり、他方でこの理性は、極めて簡単に振り落とされる身軽な乗り手であるのは、長い経験で分かっている。

これを読むと彼はどうにもよく分からない言辞を弄している人物としか思えない。したがって、彼は「皮を剥がれる女」を実際には見ておらず、あたかも事実として記述しているに過ぎないとも言えなくはない。要は、この『桶物語』という書物の筆者をどれほど真面目な人物として扱い得るかという問題に帰着

することがらである。少なくともこうした記述がスウィフトにより（表面的には、『桶物語』の筆者により）実際になされていることだけは事実である。そして、その後に長々と書かれている本来の趣旨である、表層の欺瞞性を明らかにすることに費やされている「伊達男」(a *Beau*) についての長い文章よりも、「皮を剥がれる女」にまつわるわずか一文の方こそ、読者に与える衝撃という点で数段優っていることにも着目したい。長ければ良いということではないのだ。おそらく『桶物語』の真の作者スウィフトは、こうした読者の心理あるいは反応の仕方もよく分かった上でこの一文を挿入したに違いないのである。これはスウィフトの常套手段ではなかっただろうか。『控えめな提案』においてもこれと同じことが当てはまる。おそらく多くの読者の印象に最も強く残っているくだりは以下の短い文であろう。

> I have been assured by a very knowing *American* of my acquaintance in *London*, that a young healthy Child well Nursed is at a year Old a most delicious nourishing and wholesome Food, whether *Stewed*, *Roasted*, *Baked*, or *Boyled*, and I make no doubt that it will equally serve in a *Fricasie*, or a *Ragoust*. [25]

> ロンドンに住む知り合いのアメリカ人に聞いたところでは、１歳になったばかりの健康な子供は、煮込んでも、焼いても、茹でても、栄養満点で健康的な食べ物になるそうだ。フリカッセでもラグーでも同じように供せることは間違いない。[26]

---

[25] Jonathan Swift, *Irish Political Writings after 1725: A Modest Proposal and Other Works*, ed. David Hayton and Adam Rounce, The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, 14 (Cambridge UP, 2018), 149-150. 以下、スウィフトの原文からの引用はこの版により、ページ数を末尾に記す。

[26] 引用の日本語訳は拙訳。柴田元幸訳「アイルランド貧民の子が両親や国の重荷となるを防ぎ、公共の益となるためのささやかな提案」『柴田元幸翻訳叢書　ブリティッシュ＆アイリッシュ・マスターピース』（東京：スイッチ・パブリッシング、2015 年）、原田範行訳「慎ましき提案　アイルランドにおける貧民の子供たちが親や国の重荷とならぬようにするために、彼らが公益に資するようにするために。一七二九年執筆」原田範行編訳『スウィフト諷刺論集　召使

こうして文全体を引用してみると思ったほど短くはないが、とりわけ強烈であるのは、“[I]t will equally serve in a *Fricasie*, or a *Ragoust*.” の部分である。まさにこの文こそが『控えめな提案』のエッセンスであると言っても過言でない。本論の筆者のみならず、この文を一度でも読んだことがある者のうち、「フリカッセ」や「ラグー」をその後の人生で平然と食せる者はそう多くはいないだろう。

V

ここまでは主に「ヤフーの皮」や「人間の皮」の件を扱ってきたが、ここからはさらに考察を進め、もっぱら、人間が人間の肉を食うことについて、すなわち「人類の第一級の敵として告発されるもの」であるカニバリズムについて考えていきたい。[27] まずは、先ほどから考察してきている『控えめな提案』の提案者（ないし、スウィフト）が幼児の肉を使って作れと言った料理の具体例である「フリカッセ」や「ラグー」についてだ。幸いなことに本論の筆者はいずれの料理にもこれまでのところ遭遇せずに済んでいる（と思う）。だが、英国人やヨーロッパ人ならこれらの料理は彼らにとって通常のメニューに含まれるだろう。これらを食す際の彼らの心情はどういうものであろうか。我々日本人にはなかなか分かりづらいだろう。そこで我々日本人がこの感覚を身近に感じたいという場合はどうすれば簡便かを考えてみよう。仮に「フリカッセ」や「ラグー」に相当する肉料理を何か挙げるとすれば、その選択はなかなか難しいことだが、例えば身近なところで「肉じゃが」はいかがかと思う。肉じゃがの肉が牛肉か豚肉かは、関東と関西では異なるらしいが、どちらでも大した違いはない。もしその肉が人間の「幼児の肉」だったらどうだろうか想像せよというのであれば、肉の種類や汁気の多少には難があるものの、「肉じゃが」の例は我々日本人にとって感覚的に分かりやすいのではなかろうか。ただし、風刺の

心得　他四篇』（平凡社、2015 年）などを参考にした。

[27] マルタン・モネスティエ、大塚宏子訳『図説 食人全書』（原書房、2001 年）256 頁。

対象を特に裕福な階級に定める必要があったために、スウィフトがあえてフランス風の高級料理として「フリカッセ」や「ラグー」という料理を挙げているとすれば、話はまた変わってくる。「肉じゃが」では庶民的すぎるからだ。かといってこれに代わる良い例は飽食の日本では思いつかない。それこそ「フリカッセ」や「ラグー」を食べようと思えば食べられるからだ。どんな料理に置き換えてもいいのだが、要は、本を読むだけで想像するか、実際に何かを食して、実感として提案者の意図を味わうかという違いが存在するということである。

ここまで、『控えめな提案』を読んだ際にどういう反応が読者にありうるか、また、その反応は作者の意図通りに衝撃的なものとなり得るかどうかについて考えてみた。しかしながら、洋の東西を問わず、『控えめな提案』のこの部分を読んだ後でも、衝撃を受ける人は受けるであろうし、平気な人は平気であろう。また読んだときは衝撃を受けても、それをすぐに忘れてしまう者もいるに違いない。平気でいられる場合の理由の一つとしては、実際に「幼児の肉」を食している場面自体は『控えめな提案』には描かれてはいないということが挙げられるだろう。要するに提案されているだけなのだ。この作品における「食人」は実は単に言葉の上だけの衝撃を与えるに過ぎない。また別の理由として、この作品での作者スウィフトの主要な目的として、アイルランドに対するイングランドの搾取の問題が作品の背景に厳として存在しているという事情も挙げられるだろう。作品の背景をよく理解している読者であれば、その念頭にはアイルランド問題が存在しているはずだ。だとすれば、スウィフトが風刺に込めた意図という問題を一旦棚上げしない限り、「食人」の記述は背景に追いやられてしまうことになり、衝撃の度合いは少なくなる、という図式が成り立つだろう。

料理の名を挙げたあと、提案者は手を変え品をかえ、提案の中身を敷衍していく。そうした流れ全体を俯瞰してみた場合、以下の部分も本論の前半で論じた事柄と関わりが深いことに気がつく。すなわち、「倹約を心がける方は（実際のところ時代がそれを要求しているわけで）死体の皮を剥いでもよい。その皮を巧みに仕上げれば、婦人用の立派な手袋や紳士用の夏物ブーツになるであろう」“Those who are more thrifty (*as I must confess the Times require*) may flay the Carcass; the Skin of which, Artificially dressed, will make admirable *Gloves for Ladies*, and *Summer Boots for fine Gentlemen*.” (151) という箇所

である。ここでもやはり風刺の対象としての階級が裕福な上流階級に限定されているようだ。その上、先に見たように、ガリヴァーの、「皮」を用いるという行為の反復がここに描かれているのである。とはいえ、『控えめな提案』は全体としては非常にグロテスクな文章ではあるものの、読者に与える衝撃はさほどでもないという結論になりそうである。いかにスウィフトが奇妙で衝撃的な作品を世に問うたとしても、結局のところ、衝撃の度合いも、これよりもっと衝撃的なものの前では色褪せてしまう。結局は比較の問題に過ぎないと言えるだろう。

比較の対象は数多く考えられるが、ここではスウィフトからも影響を受けたであろう、マルキ・ド・サドの『食人国旅行記』を取り上げることにしよう。この作品ではもっと直接的な描写がなされるため、衝撃の度合いは随分と高まる。[28] この作品では、人々は本当に人間を食うのである。もっとも、主人公（兼、語り手である）サンヴィルに限って言えば、彼自身は人間を食うことはない。彼は「食人」を目撃するに過ぎない。この点では読者に与える衝撃の強烈さは、彼自身が食人する場合と比較すれば、さほどではないとも言える。しかしながら、彼とともに「食人」を目撃するという点では、読者もまた当事者なのである。この点で、単に料理法を提案しただけの『控えめな提案』の読者とはかなり異なる立場に置かれている。

> わたしが見た大勢の人間は、ジャガ国の土人たちでしたが、（中略）木の下までくると、土人の隊長は、あわれな捕虜たちを点検し、六人だけ前に出させて、隊長みずから棍棒をふるって、一撃のもとに彼らをなぐり殺してしまいました。すると部下の四人が、殺された人間の身体を切りこまざき、血のしたたる肉片を、隊員一同に分配するのでした。どんな肉屋だって、これほどすばやく牛の肉を切りこまざくことはできなかろう、と思われました。それから土人たちは、わたしのよじのぼっている

---

[28] 『食人国旅行記』は澁澤龍彦がつけた表題であり、元々は 4 巻からなる『アリーヌとヴァルクール、あるいは哲学的物語』*Aline et Valcour, ou le Roman philosophique*（1795）の一部である。第 2 巻「サンヴィルとレオノールの物語」のうちのサンヴィルの空想旅行記の部分のみを独立させてある。

> 木の隣りの木を根もとから引っこ抜くと、枝を取り除き、これに火をつけて、今きりこまざいたばかりの人間の肉片を、その炭火の上でこんがり焼くのでした。ぱっと焔が燃えあがると、さっそく土人たちは、肉片をうまそうにがつがつ食ってしまいました。それを見て、わたしは思わず慄えてしまったものです。[29]

これはいかにもグロテスクな描写である。澁澤龍彦の訳はいつもながら丁寧で品があるが、ひらがなを多用した、優しくなだらかな文体を超えて恐怖が迫ってくる。質量ともに『控えめな提案』の比ではない。この後の場面では土人たちは、また別の捕虜の１人を生きたまま木に縛り付け、徐々に肉をこそげ落として生で食すのである。主人公（兼、語り手）のサンヴィルは、アフリカの奥地で妙な体験をするのであるが、そこにはサルミエントという名のヨーロッパ人が１人以前から住んでいて、彼の相手をする。サド特有の哲学的なやりとりが交わされるのであるが、印象的なのはサルミエントの「そんなつまらんことを、きみはいちいち気にするのかい？ 郷に入っては郷に従え、さ。これを忘れたら生きていけないよ」というセリフである。「そんなつまらんこと」とは、主人公の目の前に供された肉料理の原材料が、つい今し方生贄にされた女の肉なのではないか、という疑いなのである。主人公は危うく人肉を食わされそうになったのを回避する。実際はこの肉は人身御供の女の肉ではなく、前日の戦闘で捕えられた敵国の男の肉であったのだが、人肉であったことに変わりはない。サルミエントはその人肉料理を平気で貪り食うのだが、彼は続けてこうも言っている。「人肉食の習慣を品性の堕落だなどと考えては困るな。人間を食うことは、牛を食うことと同様に単純なことだよ」と。(67-68 頁)

この作品のテーマは、簡単に言えば、社会制度が異なれば、そこでの人の生活も異なって当然であるということであろう。サドの場合は彼の様々な作品においてそれが常に極端な形で提示されるため、ややもすると読むのも忌まわしい作品とみなされ、真面目に取り上げることすら憚られるという事情があった

---

[29] マルキ・ド・サド、澁澤龍彦訳『食人国旅行記』（河出書房新社、1987 年）51 頁。

と思う。もちろんサドの評価自体、時代や社会が異なればまったく違ってくるのはわざわざここで言うまでもないことではあるが。

さて、サルミエントが（あるいは、真の作者であるサドが）主張するように、人肉を牛肉と同等に考えることは流石に我々にとっては難しいことであり、その点は本作『食人国旅行記』の主人公（兼、語り手である）サンヴィルと同じなのであるが、逆に牛肉を我々は普段から平気で食べていることについてはどうだろうか。もちろん、ベジタリアンやヴィーガンの人たちはここでの「我々」の中に入れていない。また、先ほどの「肉じゃが」のように牛肉と豚肉を同等に扱ってしまうと、今度は宗教的な事情が絡んできて話が複雑になる。豚肉を忌避する宗教のことを念頭に、当面は、例を牛肉に限り、ベジタリアンやヴィーガン以外の人々を想定して論じていく。[30] ここで思い出されるのは、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』（*The Last Mimzy*）の印象的な場面である。主人公の女の子供（エマ）がハンバーガーを口にする場面だ。真っ二つに切られて調理されるカニをテレビの料理番組で見て、どうして殺すのか訝しがる妹に対し、居合わせた兄（ノア）の台詞「じゃあ今食べ中の切り刻んだ牛はどうなの？」“What about that chopped up cow you are eating? ” という言葉で、エマは今まさに口にしたハンバーガーの肉を思わず吐き出してしまう。[31] 我々大人がすでに慣れきってしまっている事実を初めて突きつけられた際の幼い子供のこの反応は、ある程度自然な表現に思える。もちろん、牛肉の元がウシであるということを初めて聞いた際に、どの子も同じ反応をするということではないだろう。しかしながら、大抵はある程度のショックは受けるのではないだろうか。この作品の妹エマを演じている子役の演技の上手さも相まって、このシーンは非常に良くできていると思う。先に問題にしたのは「郷に入っては郷に従え」という文言が地理的な変化に即して対応すべきことを諭した言葉であるとすれば、この女の子の素朴な反応と、その後の彼女が成長するにつれて、ハンバーガーなどの肉料理を平気で食べられるようになるであろうことは、いわばこの諺の変形ではなかろうか。すなわち、地理的な変化ではなく時間的な

---

[30] 豚肉と同様、牛肉を忌避する人々もいる。さらには他の動物の肉を避ける人々もいる可能性もある。こうした事情は今は問わないでおく。

[31] 作品開始後 04'20"の場面。

変化にも人は対応すべきことを表したものに思える。この件は、個人の成長に限らず、社会の変化や時代の変化に人は自らを適応させていかねばならない、という問題にまで拡大することが可能である。『ミムジー』の中の女児の例に見られるように、個人の成長や環境の変化で思考や態度も変わる、ということだ。では、大人はなぜ平気でウシを食えるかということに目を向けてみよう。

我々大人は、ハンバーガーの肉が元は生きたウシであったという事実を重々理解した上で、それをいつも美味しく頂いているが、その事実をまったく忘れ去っているわけではない。想像力を一時的に封じ込んでいるに過ぎないのだ。そしてある切っかけで無理に現実認識をさせられる状況が訪れる。その一つが、以下に取り上げる、ポチリストという二人組の漫才である。タイトルは「ヴィーガン VS 教育ママ」であり、これを筆者は動画で視聴した。[32] その大筋は、可愛い動物であるウシを食べることはそれを残虐に殺すことと同様であると説くヴィーガンの主婦と、注文した黒毛和牛のステーキ（２ポンド）を彼女の目の前で食べようとしている友人の主婦（教育ママ）との会話で成り立っている。会話の舞台は、とあるレストランであるようだ。通常の漫才とは異なり、二人の顔のアップが交互に、いわゆるカメラ目線で映る仕掛けである。ウシだけにモーやめて、などという定番のギャグも月並みであるし、鬘で女装した男性二人の口調も素人臭く、漫才としては高級とは言えないかもしれないが、ここでの笑いの基盤は、先に述べた、動物の屠殺と食材としてそれを味わうことの乖離の問題である。ここでは『ミムジー』のノアとエマの兄妹が、２人の主婦に置き換えられているわけだ。違いといえば、ヴィーガンの主婦はかつては牛肉を食していたであろうことと、妹エマはこれからはおそらく牛肉を食べられるようになるであろうこと、という２点にすぎない。ヴィーガンの主婦と妹エマは、可愛いウシさんを食べることに抵抗があるという点では同じだ。そしてこの２人は、良く言えば想像力が豊かであり、悪く言えば世の現実を受け入れることができない人物であるということになる。ただし、ヴィーガンの人たちの場合は自分の信念として肉食を拒否しているわけで、彼ら／彼女らにとっての

---

[32] ポチリスト「ヴィーガン VS 教育ママ」
<https://www.youtube.com/watch?v =QQH0iTFvP7M>（2023 年 11 月 21 日視聴）

現実が肉を食わないことであると考えるならば、現実に適応していないのではなく、自分にとって望ましい現実を自ら創出しているということではある。さらにはこの漫才はヴィーガンの人たちに対する風刺であると取れなくはない。あるいは、ヴィーガンの人たちに対するそれ以外の人たちの無理解を風刺したものであるとも言える。しかしながら、風刺に必要なユーモアのセンスの欠如は如何ともし難い。この点は残念なことである。

ウシの件を扱ったために、「食人」のテーマから少しはずれてしまったようだ。そこで、今一度「食人」に戻って考えてみたい。先ほどのサドの場合は、言わば哲学的な食人であったが、これとはまったく逆のスラップスティックな食人を描いた作品も対極にある。こちらもスウィフトの影響が明らかな作家、筒井康隆の短編「人喰人種」だ。サドと同様にこの作品の語り手兼主人公も、自らが食人をするというわけではない。逆に自分が食われそうになるという設定である。この作品は一人称、それも関西弁で書かれていて、随所に笑いの要素が充満していて、非常にユーモラスであるだけでなく、作品が発表された 1990 年当時の日本が抱えていた問題点をもあらためて参照することのできる短編である。いろいろな点で先の漫才とは一線を画している。冒頭の「わいは人喰人種に摑まってしもうた。」からしておかしみを誘う秀逸な表現だ。一気に筒井ワールドへと読者を引き込んで行き、あとは一気呵成に結末へと至る。幕切れの一文はこうだ。「わいは猟銃をとって日本人に銃口を向けた。それから、一発ぶっぱなした。」人喰人種に再三再四食われそうになるにもかかわらず、「わい」はその都度命拾いしてきたのだが、ここに至って、風刺の対象が実は日本人全体であったことが分かるだけでなく、このあとの彼にはどうやら別の種類の死が待っているという予感を含みつつ、作品は開かれたまま終わっている。

こうしてみると「食人」を読む際は相反する要素に注意しなければならないことが分かる。人として犯してはならないとされる禁忌に触れた際、それをそのまま受け入れるのではなく、ユーモアの外皮に包んで飲み込みやすくするという反応がその一つである。あるいは「食人」について書く際も同じことだろう。もちろん、それぞれの作者によって目指すものは異なるので一概には言えないが、やはり、ユーモアの要素を用意することで、自分自身も禁忌を描きやすくするという面があるに違いない。ただしそれはおそらく単なるユーモアで

はなく、いわゆるブラックユーモアの範疇に入るものであるだろう。ここで改めてガリヴァーの場合を見てみよう。するとそこには明示的ではないにせよ、ユーモアの気味が見え隠れしてはいないだろうか。

結び

最後に、『フウイヌム渡航記』での、ガリヴァー、ヤフー、フウイヌムの立ち位置を考えてみよう。そもそもガリヴァーは、人類の一員である。彼が遭遇したヤフーは人間とも言えるし動物とも言える。あるいはその中間であると考えても良い。ガリヴァーから見てヤフーはこのように非常に曖昧な存在である。その曖昧さも、変な言い方だが、首尾一貫して曖昧というわけではなさそうだ。ある場面ではまったくの動物扱いをしているかと思えば、ある場面ではガリヴァーはヤフーと人類を同一視している。それは主にフウイヌムの主人に人類の置かれた事情や状況を説明する箇所において顕著である。ガリヴァーは（この場合はむしろスウィフトの、と言うべきであるが）、風刺の意図が常に存在しているのだ。そのような場面ばかりに注目すれば、ガリヴァーがヤフーの「皮」を有効利用していた上に、彼らを食してもいたという状況は、とりもなおさず「食人」そのものだと解釈されることだろう。一方において、ヤフーを人類とはまったく異なる別種の動物だと考えれば、ガリヴァーがヤフーの皮をモノ作りに有効利用していようが、そのこと自体何の問題もないことになる。なぜならガリヴァーにとっても読者にとっても、ヤフーは牛や豚と同じ動物の一種に過ぎないからだ。本論でのヤフーに対する見方としては、どちらかといえばヤフーを人間とほとんど同一視した上での議論であった。しかし、よく考えてみれば、この態度が妥当なものであったとは断定することはできない。もし仮に、ガリヴァーがヤフーを単なる動物とみなしていれば、ヤフーの皮を利用するのと同じ感覚でヤフーの肉を食したであろうと読者が想像することは比較的簡単なことであるだろう。一方、ガリヴァーの意識の中において、ヤフーが人間と同じ、または人間と重なる部分が多くあるという判断をしていた際は、ヤフーの皮を利用するのと同じ感覚で、ガリヴァーがヤフーの肉を食ったのではないかという疑いを読者が持つことは、ガリヴァーは「食人」をしたのではないか

との疑いを持つことと同じことになる。ヤフーもガリヴァーも、そして当の読者も、皆人間であるという状況が生じるからである。そして筆者としては、それはあまり妥当でないとの判断をせざるを得ない。やはりヤフー共を人間と呼ぶには抵抗があるからだ。ガリヴァーの意識と読者の意識はここで決定的に異なっている。ガリヴァーが「食人」をしたと断定するためには、まずはヤフーを人間とみなすか否かが問題になるということである。したがって、本論の前の方ですでに用いた用語である「食ヤフー」という語を「食人」の代わりにここで改めて提案しておく。以後はこの用語を用いて考察を進めることにしたい。

ここで不気味に浮かび上がってくるのはフウイヌムの姿だ。18 世紀当時の人間の社会では馬車馬などとして散々虐げられている馬が、フウイヌムの国ではすべてのものの優位に立ち、ヤフー共やガリヴァーを見下げているという図式が揺らぐことなく確立している。この点がガリヴァーの不安定な立場とはまったく異なる。さらにはヤフーの立場とも異なっていると言える。フウイヌムたちは常に、ヤフーと、ヤフーを虐げるガリヴァーとの軋轢を、高みの見物と洒落こんでいるわけだ。結局のところ、ガリヴァーが「ヤフーの皮」を有効利用していようが、そのついでに、栄養補給のためか嗜好を満たすためか、はたまたヤフーに対する恨みからか、その理由はどうであれ、「ヤフーの肉」を食っていたとしても（それももしかすると『控えめな提案』を先取りする形で、「ヤフーの仔の肉」を食っていたかもしれないが、仮にそうであったとしても）フウイヌムにとっては我関せず、どうぞ勝手にしてください。そのうち撲滅するなり、追放するなりしてやりますから、ということであるに過ぎない。本論の最初の方でフウイヌムを草食動物であるとしたが、その中身はといえば、草食動物のおとなしいイメージとはかなりかけ離れた存在であるようだ。

ガリヴァーが「ヤフーの肉」を食していたのではないかという当初の疑いは、最後まで疑いのままに終わってしまったが、それは致し方ないことである。このことは実は初めから想定内のことでもある。本論ではその疑いを提示し、それにかこつけて、論の前半ではもっぱら「皮」に注目し、珍しい「人皮装丁本」の存在に目を向けた。後半では、肉食や人肉食の諸相について『控えめな提案』をはじめとする幾つかの作品を手がかりに考察してみた。最終的にはフウイヌム国でのガリヴァー、ヤフーそしてフウイヌムの３者の微妙な関係についての

私見を述べた。全体としては「食人」と「食ヤフー」にまつわる様々な問題点を『ガリヴァー旅行記』とその他の作品について論じてきたわけである。

最後に、地理的、時間的、形式的に視野を広げてみれば、「食人」を扱った作品は本論で扱った作品以外にも枚挙にいとまがない。今、筆者の問題意識の中にあるものを年代順に挙げると、マルコ・ポーロの『東方見聞録』（14 世紀）の、我々日本人がもっぱら黄金郷として記憶するジパングで行われているとされる食人。シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』（1594 年）の肉親の肉入りのパイを無理に食べさせられる悲劇。サルマナザールの偽書、『台湾誌』（1704 年）にはこう書かれていると『控えめな提案』の提案者が言う、「若者が死刑になった時は、死刑執行人は必ず、上等の珍味として、高貴な人々に死体を売却した」“[W]hen any young Person happened to be put to Death, the Executioner sold the Carcass to *Persons of Quality*, as a prime Dainty” (153) という記述が本当かどうか。ハーマン・メルヴィルの『タイピー』（1846 年）での食人種のリアルなあり様なども念頭に浮かんでくる。ロード・ダンセイニの短編『二瓶のソース』（1952 年）は、一生懸命木を切り倒していたベジタリアンの男が実は殺人犯でありかつ「食人」も行なっていたらしいという、奇妙な味の作品の嚆矢となった話だ。

我が国に目を転ずれば、中島敦の『狐憑』（1942 年）は、未開野蛮な古代人の行為でホメロス以前の立派な詩人が周囲の無理解のせいで消え去る話。武田泰淳の『ひかりごけ』（1954 年）は、太平洋戦争中の極限状態を舞台上に再現した悲劇だ。日影丈吉の『食人鬼』（1958 年）は、同じく太平洋戦争中に、生存者が食人の疑いを掛けられた末、食人鬼の子だという汚名からわが子を逃れさすため、その子に偽装した猿の仔を茹でる話。拓未司の『禁断のパンダ』（2008 年）は、関西弁（神戸ことば）のグルメミステリー小説、宝島社第 6 回「このミステリーがすごい！」大賞を受賞した作品だが、いつ実際の「食人」が描かれるかという期待あるいは心配を最後まで読者に持続させる構成は見事である。

メディアを文学作品から他の形式に広げれば、ホラーアニメやホラー映画で描かれる「食人」は、観る者の視覚や聴覚に直接訴えてくるため、その衝撃は文学作品の比ではなかろう。筆者などは思わず目を背けてしまうことになるのは必定だ。また、現実に行われた、異常な心理からくる犯罪としての「食人」

を考察すれば、精神分析の領域に踏み込むことになろう。文化人類学の領域に目を向ければ、世界各地での風習としての食人にも大いに関心がある。いわゆる「人喰い人種」として西洋文明社会から偏見の目で見た「未開」の問題がそこにはある。さらには、お隣の国、中国に目を転じてみれば、そこはまた特別「食人」が頻繁に行なわれた、世界でも珍しい独特の歴史と文化を持つ社会であるらしい。さらには、世界のどの国や地域でも、戦争中や遭難中、飛行機が落ちた際などの緊急やむを得ない場合の「食人」ということになると、悲惨さの点ではこれに並ぶものはないだろう。こういう極限状態では人間性そのものが問われることになるはずだ。こういうわけで「食人」のテーマはほとんど際限なく広がっていくものである。あまりに範囲を広げ過ぎるのもいかがなものかとは思うが、これからも「食人」について考察を深めていくことを今後の課題としておく。

参考文献

Jonathan Swift. *Gulliver's Travels*. Ed. Albert J. Rivero. New York: W.W. Norton, 2002.

———. *Gulliver's Travels.* Ed. David Womersley. The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, 16. Cambridge UP, 2012.

———. *Irish Political Writings after 1725: A Modest Proposal and Other Works.* Eds. David Hayton and Adam Rounce. The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, 14. Cambridge UP, 2018.

———. *Gulliver's Travels.* Ed. David Womersley. The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, 16. Cambridge UP, 2012.

Armstrong, Philip. *What Animals Mean in the Fiction of Modernity.* London and New York: Routledge, 2008.

Ehrenpreis, Irvin. "How to write *Gulliver's Travels*" *Swift Studies 2003*: *The Annual of the Ehrenpreis Center.* Munster: Wilhelm Fink Verlag, 2003.

ジョナサン・スウィフト、梅田昌志郎訳『ガリバー旅行記』東京：旺文社、旺文社文庫、1976 年。

———、坂井晴彦訳『ガリヴァー旅行記』東京：福音館書店、1988 年。
———、柴田元幸訳『ガリバー旅行記』東京：朝日新聞出版、2022 年。
———、高山宏訳『ガリヴァー旅行記』東京：研究社〈英国十八世紀文学叢書 2〉、2021 年。
———、富山太佳夫訳『ガリヴァー旅行記』東京：岩波書店〈ユートピア旅行記叢書 6〉、2002 年。
———、中野好夫訳『ガリヴァ旅行記』東京：新潮社、新潮文庫、1992 年改版。
———、原民喜（再話）『ガリバー旅行記』東京：講談社、講談社文芸文庫、1995 年。
———、平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』東京：岩波書店、岩波文庫、1980 年。
———、山田蘭訳『ガリバー旅行記』東京：角川書店、角川文庫、2011 年。

マルキ・ド・サド、澁澤龍彦訳『食人国旅行記』東京：河出書房新社、1987 年。
ジョナサン・スウィフト他著、柴田元幸編訳『柴田元幸翻訳叢書 ブリティッシュ＆アイリッシュ・マスターピース』東京：スイッチ・パブリッシング、2015 年。
筒井康隆「人喰人種」『最後の伝令』東京：新潮社、新潮文庫、1996 年。
原田範行、服部典之、武田正明『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈［注釈篇］』東京：岩波書店、2013 年。
原田範行訳「慎ましき提案　アイルランドにおける貧民の子供たちが親や国の重荷とならぬようにするために、彼らが公益に資するようにするために。一七二九年執筆」原田範行編訳『スウィフト諷刺論集 召使心得 他四篇』東京：平凡社、2015 年。
中野好之、海保真夫訳『スウィフト政治・宗教論集』東京：法政大学出版局、1989 年。

富士川義之訳「スウィフト 桶物語 抄」『澁澤龍彦文学館 3 脱線の箱』、東京：筑摩書房、1991 年。
深町弘三訳『桶物語・書物戦争』東京：岩波書店、岩波文庫、1968 年。
マルタン・モネスティエ、大塚宏子訳『図説 食人全書』東京：原書房、2001 年。
山内暁彦「原民喜『ガリバー旅行記』の「アンポニア」と「ヤーフ」、Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* の "Amboyna" と "Yahoo" について」『言語文化研究』徳島：徳島大学総合科学部、2021 年。
吉岡郁夫『身体の文化人類学－身体変工と食人－』東京：雄山閣、1989 年。

参考資料

ジョナサン・スイフト（Jonathan Swift）原民喜訳『ガリバー旅行記』（Gulliver's Travels）青空文庫。
<https://www.aozora.gr.jp/cards/000912/files/4673_9768.html>（2023 年 11 月 11 日閲覧）

国立国会図書館「インキュナブラー西洋印刷術の黎明ー、第四章 製本と装丁」
<http://www.ndl.go.jp/incunabula/chapter4/index.html>（2023 年 11 月 8 日閲覧）

ポチリスト「ヴィーガン VS 教育ママ」
<http://www.youtube.com/watch?v =QQH0iTFvP7M>（2023 年 11 月 21 日視聴）

「生きた人間の皮膚で作られた『人皮装丁本』がハーバード大学の図書館で発見される・・・まるでクトゥルフ神話だな！」
<http://jin115.com/archives/52012150.html>（2023 年 10 月 27 日閲覧）

「そして犯人の皮膚は本の装丁にされた　赤い納屋殺人事件」
<https:// 441notepad.com/red-barn-murder>（2023 年 10 月 30 日閲覧）

「人皮装丁本～人間の皮で作られた本が世界で 100 冊以上存在する 【若い女性や犯罪者の皮膚を使用】」
<https://kusanomido.com/study/overseas/72574/>（2023 年 11 月 14 日閲覧）

『ミムジー：未来からのメッセージ』（*The Last Mimzy*）ロバート・シェイ監督、ニュー・ライン・シネマ、2007 年。DVD。